

教育社会学とジェンダー

—私の研究紹介—

人文学部教授 藤田 由美子

2016年4月に人文学部教育・臨床心理学科に着任いたしました、藤田由美子です。中国地方で生まれ育ち、その後、大学専任教員として九州、北海道と移り住み、このたび九州に戻りました。どうぞよろしくお願いたします。

専門は教育社会学で、「ジェンダーと教育」をテーマに、研究に取り組んできました。以下、これまでの研究を紹介し、今後の課題について述べます。

教育社会学研究におけるジェンダー

教育社会学は、教育学と社会学の中間領域ですが、社会学的な教育学とも、あるいは教育の社会学ともいえます。現在は、教育という現象を社会学の研究手法を用いて分析・考察する学問、と一般的に定義されています。

教育社会学のテーマは、学業達成・学歴・進路形成、逸脱・非行などの教育問題、ジェンダー・社会階級・マイノリティ、家庭教育・幼児教育・学校教育・高等教育、などと多種多様です。研究方法も、計量的研究、質的調査研究、理論研究と多様です。

この教育社会学において、「ジェンダーと教育」というテーマは、1990年代前半以降に認知され、一定の位置を占めるようになりました。1950年代以降に盛んとなった「性差」研究のフェミニスト的批判を踏まえ、1970年代以降に女性の経験を可視化しようとした「女性と教育」研究の興隆を背景に、社会的カテゴリーとしての「性」がいかに形成されるか、その社会的インパクトはいかなるものであるか、を明らかにしようとする「ジェンダーと教育」研究が行われるようになりました。近年では、ポスト構造主義およびクィア理論の影響、性の多様性の社会的認知などの諸変化を踏まえ、「女性-男性」の二元論を超えた視点の必要性が論じられています。

研究生生活の入口 ——ジェンダーへの関心

私が大学生生活を送った1980年代後半はバブルの絶頂期、男性の（経済的／社会的）優位が当然のものとみなされてきた時代でした。それは一地方大学の学生生活におけるさまざまな慣行にもあらわれていました。たとえば、飲み会の会計は、あたりまえのように男性が多額あるいは全額を負担していましたし、課外活動やレクリエーションの役割分担においても、一定の性別役割分業がみられたものです。

私にとって興味深かったのは、それらの行為は、もっぱら男性が女性を抑圧しているために生じているというよりも、私を含む女性も進んでその秩序を受け入れその維持に加担しているように見えたことでした。私は次第に、私たちのジェンダー化された行為は、大学を含む学校教育の影響を受けているのではないかと考えるようになりました。そして、当時はまだ一般的に認知されていなかった「ジェンダー」ということばをイリイチ (I. Illich) の『ジェンダー』で知り、漠然と卒業論文のテーマにしたいと考えるようになりました。しかし、未熟な私は、指導教官にそれをうまく伝えることができずにいました。

卒業論文のテーマを、すでに先行研究がある教科書分析に決めようと思っていたところ、指導教官より学校放送番組の内容分析を勧められました。そこから、卒業論文と修士論文で子ども向けテレビ番組の内容分析研究を行い、登場人物の相互作用に、「男性＝主導的」対「女性＝従属的」、あるいは「男性＝活動的」対「女性＝受容的」といった役割分化がみられることを明らかにしました。

しかし、人々の教育経験におけるジェンダーの問題を明らかにしたいという思いはさらに募りました。そこで、共同研究での大学生への質問紙調査にジェンダー経験の項目を加えて分析を行い、その後個人

研究で、幼児保護者を対象に、教育観・ジェンダー観を尋ねる質問紙調査を行いました。

幼稚園・保育所（園）のエスノグラフィ

子ども向けメディアの内容分析研究をしばらく行った後、当時の指導教官に子どもがメディア情報を活用する実態を観察した方がよいのでは、という助言をいただき、幼稚園の観察調査を始めました。

調査開始当初は、上記の経緯よりメディア情報を利用する子どもの生活を明らかにすることを目指していました。しかし、次第に、子ども自身の振る舞いに、「二分法的なジェンダー」へ、お互いを社会化しあうばかりではなく、何が「二分法的なジェンダー」であるかという意味をつくりあげている——つまり「二分法的なジェンダー」を構築している——ことに気づくようになりました。

「二分法的なジェンダー」への社会化とは、「自分たちは『男』と『女』のどちらかに属する」ということを理解する／させる、という意味です。子どもたちは、たとえば「男の子／女の子」と呼ばれたり性別の列に並ぶことを求められたりする園生活の中で、自らが二つの性のどちらかに属すると理解すると考えられます。私が観察調査を行った園の子どもたちは、しばしば、自らの属する（生物学的）性とは異なる集団への帰属とみられる行為をした子ども（例：男の子が女の子の多くに好まれるキャラクター商品を所持している、女の子が青色のボールを男の子から奪う、など）に対して、嘲笑や罵りなど、負のサンクション（sanction）を行っていました。

子どもたちの世界を観察して、かれらが単なるジェンダーへの社会化の受け手ではないのでは、という問いが生まれました。子どもたちは、大人の世界におけるジェンダー知を自らの世界に取り入れ、その意味を構築していました。たとえば、かれらは「ケッコン」といったことばを用いて、男の子と女の子の二人組の遊びや人間関係を意味づけていました。その行為を通して、かれらは「女性と男性は対である」というジェンダー知を知るとともに、その意味を自ら構築している、という知見を得ました。

これらの知見の基盤には、数年間にわたる観察調査とともに、これまでの約20年間に展開された「主体としての子ども」や「ジェンダー構築」に関する

数多くの先行研究があります。具体的には、子どもの社会学研究者コルサロ（W. Corsaro）による、子どもの社会的行為における主体性を示唆する「解釈的再生産」概念、小学生の観察調査を行ったソーン（B. Thorne）による「ジェンダー・プレイ」（Gender Play）の発見、デイヴィーズ（B. Davies）による幼児によるフェミニスト物語の解釈に関する研究、バトラー（J. Butler）によるジェンダーの起源に関する考察、コンネル（R. Connell）による「ヘゲモニックな男性性／誇張された女性性」概念、などです。

以上に述べた幼稚園・保育園のエスノグラフィは、約10年の歳月をかけて、博士論文『幼稚園・保育園における子どものジェンダー構築に関する教育社会学的研究』にまとめました。これを全面的に加筆修正し、昨年9月、『子どものジェンダー構築——幼稚園・保育園のエスノグラフィ』（ハーベスト社刊）として上梓しました。

残された問い

博士論文をまとめたことで、新たな課題が生まれました。今後は、下記の課題について、理論的考察および質的・量的調査研究に取り組む所存です。

第一に、「二分法的なジェンダー」の脱構築です。二分法的なジェンダーが子どもたちによって共有されていることや子どもたち自身がその概念を構築していることを明らかにする一方で、二分法的なジェンダー・カテゴリーに還元する論述に終始することにより、結局「二分法的なジェンダー」を相対化できなかった、という限界があります。ここには、最近ようやく問題として認知されつつあるセクシュアル・マイノリティなど、性の多様性への視点が欠けているといえます。今後は、「二分法」にとらわれないジェンダー論の構築が必要と考えます。

第二に、「身体化されるジェンダー／セクシュアリティ」の問題です。幼児の観察調査を通して、ジェンダーにかかわる知はしばしば身体性を伴うものとしてたちあられました。今後は、子ども期・青少年期における身体の知／知の身体化を、さらに探究する必要があると考えます。

今後、「ジェンダー」という日常的ゆえに困難な問いを中心に、教育と社会における諸問題の探求にとりくむ所存です。ご指導ご鞭撻のほど、なにとぞよろしくお願いいたします。

ケーラー幾何学：微分幾何と代数幾何の交流

理学部教授 佐野 友二

はじめに

この4月に熊本大学理学部から理学部応用数学科に赴任いたしました。学生時代は東京で過ごし、学位を取ってから北は北海道、南は九州、遠くはヨーロッパ（フランス・イギリス）と巡り、現在に至ります。このたびは今までの研究活動を振り返って紹介する機会をいただきましたが、若輩者の私にとっては身に余る大役でございます。しかしながら折角の機会ですので私の専門分野を紹介しつつ研究活動を振り返りたいと思います。

ケーラー幾何学

私の専門を一言で述べますと「ケーラー多様体上の微分幾何学」です。今の幾何学で基本的な空間の概念のひとつが多様体です。その中でも最も素朴な多様体が位相多様体です。多様体とは近づくときユークリッド空間の座標が入っているけれど遠くから見ると様々な形をしているものです。地球の表面に地図を描くことを思い浮かべてもらえたらとよいかと思えます。位相多様体には近い／遠いといった概念（位相）はありますが、長さの概念はありません。さらに形をグニャグニャと（連続的に）動かしても同じものとみなします（所謂トポロジーと呼ばれる分野です）。そこにもう少し（硬い）条件を加えて微積分ができるようにしたものを可微分多様体と呼びます。さらに長さの概念（リーマン計量）を加えたものをリーマン多様体と呼びます。このように空間にいろいろな構造を加えていきます。ケーラー多様体は複素数上のユークリッド空間を張り合わせてできる複素多様体に長さ（計量）を入れて、さらにそれらがうまく連動しているようなものです。このように書くと位相多様体と比べると色々な制限がついてしまったように見えますが、ケーラー多様体はたくさん例を含みます。特に多項式 $=0$ で表され

る代数多様体はケーラー多様体の主要な例です。もちろん複素数を扱っていますので、目で見て形を捉えることはできません。目で見る代わりに曲率を調べることで形を捉えます。空間の上で長さが決まると、それに対して平行移動という概念（接続）が決まります。平面の場合には矢印を平行に動かしても矢印の方向は変わりません。しかし空間が曲がっている場合、例えば球面などの場合には矢印を動かす経路によっては矢印の方向がずれてしまいます。このような矢印のずれを定量化したものが曲率です。曲率が決まれば、それが一定にするような計量を探したくなるものです。なぜなら、その計量で計ったときの空間が最も均一な形をしていると考えられるからです。曲率にはいくつかの種類がありますが、リッチ曲率と呼ばれる曲率が一定の計量をアインシュタイン計量と呼びます。これはリッチ曲率一定の方程式が一般相対性理論における（真空の）アインシュタイン方程式であることから由来します。私は修士のときに「ケーラー多様体上にアインシュタイン計量が存在するか？（カラビ予想）」という問題をテーマに研究を始めることになりました。この問題は1980年ごろのヤウ氏による第一チャーン類が非正のときのカラビ予想の解決（氏はこの業績によりフィールズ賞を受賞しました。現在ではカラビ・ヤウ多様体として理論物理学の重要な研究対象となっています）を始めとして目覚ましい進展を遂げてきた分野です。特に日本人研究者の貢献も大きいことも特徴的です。私が研究を始めたのは、それらの進展も一段落して次の段階に入ろうかという過渡期でした。

微分幾何学から代数幾何学へ

ヤウ氏の研究によりケーラーアインシュタイン計量（以下 KE 計量）の存在問題は第一チャーン類が

正の場合に絞られました。KE 計量が存在するか否かは、モンジュ・アンペール方程式と呼ばれる非線形楕円型偏微分方程式を解くことに帰着されます。実際に1990年代前半までは方程式を解くための解析的な研究が主たるものでした。私の最初の論文もその流れに沿ったものでした。一方で松島氏、二木氏により方程式は常に解けるとは限らないことが知られていました。そうすると次の問題は「いつ解けるのか？」となります。これは若干曖昧な問いです。「いつ」をどう表すかによって問題の難易度が変わってしまうからです。ここでケーラー多様体の例として代数多様体をあげたことを思い出します。実は第一チャーン類が正のケーラー多様体は小平氏（日本人初のフィールズ賞受賞者）の定理により射影的代数多様体であることが知られています。前にも述べましたが代数多様体は多項式 $= 0$ で定義される空間です。そこには計量概念はありません。代数多様体を調べるときには多様体を定義している方程式を見て、その代数的な性質を調べることで多様体の情報を捉えます。同じ多様体を扱っていても、微分幾何と代数幾何では視点が異なります。しかしながら、ヤウ氏は KE 計量の問題と代数多様体としてのケーラー多様体の性質の接点を見出し、KE 計量が存在するようなケーラー多様体は代数多様体としても良い性質（安定性）を満たすであろうと予想しました。簡単にいえば、代数幾何的な視点でよいものは微分幾何的な視点からみてもよいものだろうという主張です。この予想はヤウ氏の弟子にあたるティアン氏や、ゲージ理論の大家であるドナルドソン氏らによって定式化され、ここ20年近くケーラー幾何の中心的研究テーマになりました。この予想を解くには、多様体を微分幾何と代数幾何の両方から調べる必要があります。学生時代、微分幾何の勉強をしていた私は実のところ代数が苦手です。しかし、このような流れを前に得意も苦手もありません。何かしら論文を書かないといけないと思い、同業の研究者の皆さんの活発な研究活動にひっぱられながら、なんとか代数幾何をテーマとした論文を書くに至りました。

予想の解決

2012年に上記の予想はチェン氏・ドナルドソン氏・スン氏のグループとティアン氏により独立に解決さ

れました。その手法は微分幾何的な変形理論（グロモフ・ハウスドルフ収束）と代数幾何的な変形理論（モジュライ理論）を比較するものでした。前者の理論は微分幾何学では以前から研究されていたテーマであり日本人研究者の貢献も大きい分野です。予想の解決はグロモフ・ハウスドルフ収束の理論をケーラー幾何学に適用して多様体から代数的な情報を引き出すことで得られました。この理論は小平氏から続く複素幾何学の結果をさらに精密化するものであり、今後も様々な応用が期待されると思われます。一方で私自身を振り返りますと、やはり不勉強の祟りで、今更ながらグロモフ・ハウスドルフ収束の理論を勉強しているところです。

無手勝流のススメ

初めに私の専門は微分幾何学と書きましたが、実際のところ純粋に微分幾何学をテーマにした論文はそれほど多くありません。本当に微分幾何学を専門としているのか自信もなくなってきました。では代数幾何学の専門家になれたのかといえば、書くのも恥ずかしいほどでございます。このように振り返ると自分は何をしたかった（したい）のだろうかと思うわけですが、時折指導教官からいただいた言葉を思い出すことがあります。

「無手勝流でいきなさい」

個人的な印象ですが、ケーラー幾何を始め、幾何学は代数学・解析学に比べ比較的多様な道具・手法と広い問題意識を持つ分野だと思います。これには私のような者でも何かしら研究ができるのではないかなと思わせる懐の深さを感じています。指導教官からの言葉の真意を理解するに至りませんが、おそらく「やれることがあれば何でもやりなさい」と遅々として論文を書けなかった学生時代の私に喝を入れるために送られた言葉だと勝手に理解しています。今もこの言葉を頼りに不慣れな研究テーマ（組み合わせ論）に悪戦苦闘の日々を送っております。このような私ではございますが、まだ見ぬ研究テーマに思いを馳せながら福岡大学での研究・教育活動を続けていけば幸いと思います。